

## フーヴァー大統領の不況対策（二十五）

尾 上 一 雄

本題の（二十四）を本誌第六十九号に掲載した後、一回で完結のものを書かなければならなかったこともあり——順序が逆になったと思われるが、「フーヴァーの不況克服計画のニュー・ディールへの遺産」（成城大学経済学部創立三十周年記念論文集所収）、「ニュー・ディール立法の真髓とその経済的効果——一九三三—一九三四年——」（本誌第七十七号所収）などを書いた——旧著を書き改めていたことも加わって長い間連載を中断していたが、それらの過程で現代のアメリカの政治・経済に重要な影響を残しているニュー・ディールの本質とその歴史的意義を明らかにするために——この研究を始めた目的もそこにあったのであるが——この研究、フーヴァー大統領の不況対策Ⅱ不況克服計画の再考察・再評価の必要性を一そう強く感じるようになった。この間アメリカでフランクリン・D・ローズヴェルトとニュー・ディールに関する研究が一そう進められたし、フーヴァーに就いても新しい研究が発表されたが、それらを見ながらニュー・ディールの形成に多大な影響を与えたフーヴァーの不況克服計画の研究がまだ不十分と思ひ、この論考を早く進め完結を急ぎたいと思つていた。

第六十九号所収の本題（二十四）で、第七十二議会第一会期が終わる一九三二年七月中旬までに不況は一たん底

フーヴァー大統領の不況対策（二十五）

フーヴァー大統領の不況対策 (二十五)

をつき以後景気は回復に向かい、フーヴァーは彼の「経済的防衛と復興」のための立法計画がぐずぐずと且つ不完全にししか実現しなかったにしてもその効果を誇ることができたが、彼が大統領選挙（一般投票）でフランクリン・D・ローズヴェルトに敗れた十一月に景気は再び悪化し、ローズヴェルトが大統領に就任した翌年三月には一九三二年七月における状態に近いところまで悪くなり、そのうえ「銀行恐慌」まで加わっていたことを示したが、本号では一九三二年七月—十一月の大統領選挙戦における諸問題と両者の不況対策に就いての論争を中心にすることにする。

フーヴァーは、回顧録の第三卷『大不況・一九二九—一九四一年』(The Memoirs of Herbert Hoover: The Great Depression, 1929—1947)の第六章の見出しを不況の第一段階(Phase, 以下同じ)—一九二九年十月から一九三一年四月まで、第七章のそれを不況の第二段階—一九三二年四月から八月まで、第八章のそれを不況の第三段階—一九三一年八月から十一月まで、第九章—第十五章のそれを不況の第四段階—一九三一年十一月から一九三二年七月まで、第十七章のそれを不況の第五段階—一九三二年九月から一九三三年の三月までとし、第三十二章のそれを結末に「不況の—引用者追記—」第六段階としているが、彼は同書の第五章「不況の進展の概要」の中では、彼の施政中の不況を、一九二九年十月の株価の大暴落から一九三一年四月初めまでの十七ヵ月を第一段階(First phase)、一九三二年四月から同年七月末までの四ヵ月を第二段階(second phase)、一九三一年八月から同年十一月末までの約四ヵ月を第三段階(third phase)、一九三一年十二月初めから一九三二年十一月初めまでの十ヵ月を第四段階(fourth period)、一九三二年十一月五日(十一月五日は誤りで十一月八日である)の選挙以後を第

五段階 (fifth period) としている。そのように、第二段階の終わりを第五章の中では一九三一年七月末と述べているのに第七章では一九三一年八月とし、第四段階の始まりを第五章の中では一九三一年十二月初めとしながら第九～第十五章では一九三一年十一月としているのも気にかかるが、一そう気にかかるのは第四段階を第五章の中で「不況の第四段階 (fourth period) は一九三一年十二月初めに襲い、そして十一ヵ月続いた」と前記のように一九三二年十一月初めまで続いたとしているのに第九～第十五章ではそれ (fourth phase) の終わりを一九三二年七月までとし、第五段階 (fifth period) の始まりを第五章では前記のように一九三二年十一月初めと述べているのに第九～第十五章では一九三二年九月としていることである。これらの点に就いて同書を仔細に見れば、彼は第五章の中で「遂にわれわれは重要な法律案その他を反対〔党が支配する〕議会を押し通し、恐慌を駆逐し一九三二年七月ごろ真の「景気」回復への道にわれわれを出発させた。その「景気」上昇は、共和党が九月後半 (later part) のメイン州での選挙で敗れるまで、四ヵ月続いた」(p. 39) と述べているので、第九～十五章はメイン州での選挙で共和党が敗れた「九月後半」から不況の第五段階に入ったとして前記のような見出しにしたと見ていいだろうが、それでは景気の上昇は四ヵ月続いたことにならないし、そのうえ彼は、共和党の地盤と考えられていたのに共和党が敗れ十一月の選挙での共和党と彼の敗北を暗示した「メイン州での選挙」は「九月十四日における」と第十七章の初め (p. 100) に書いており、それは「九月後半」と書いたのと矛盾する。異なった人による別の著書や論文の間での違いなら、われわれは、その論拠を示した上で、不況の第四段階はいつからいつまでと見ると述べればいいだろうが、同じ人(後に述べるようにフーヴァーはゴースト・ライターを使わなかったと言ひ、広くそう信じられており、回顧録に就いてもそう信じたい)が同じ著書の中で違ったことを書いていては、彼の不況克服のための計

フーヴァー大統領の不況対策（二十五）

画を再評価しようとしているわれわれは戸惑わざるを得ない。彼の書き違いは正さなければならぬ。われわれは、第六十九号に示した経済指標にもとづき、一九三二年七月中旬―十月の約三ヵ月半を第七十二議会第一会期中の彼の不況克服のための立法計画の実現のための努力の成果と見るべき「不況中の景気好転期」と見て、彼が行なったような不況の段階区分をするのなら、これを第五段階とし、一九三二年十一月初めから一九三三年三月四日に至るまでの約四ヵ月を彼の大統領在任中の不況の第六段階としたい。いずれにせよ、一九三二年七月中旬からの景気的好転、フーヴァーの言う景気の「上昇」は彼が述べたように「真の「景気」回復への道」であったかどうか、彼が選挙に敗れなかったとしても早晚崩れる「景気」回復への道」でしかなかったのかどうかということも後に検討したい。

本題（一）～（二十四）の中で既に注に掲げたことがある参考文献を更に本号で掲げる場合、最初に掲げる時には著者名あるいは編者名（書名から見て明らかかなもの或いは示す必要がないと認められるものは除く）および書名を明記したが、出版社名、発行年等は省略した。

一

フーヴァーが一九三二年六月十四～十六日にシカゴで開かれた共和党全国大会で一回の投票で大統領候補に再指名されたのに対し、ローズヴェルトは六月二十七～七月二日に同じくシカゴで開かれた民主党全国大会で四回目の投票によって大統領候補に指名された。

共和党全国大会で採択された政綱（政策綱領）は、不況の継続をヨーロッパにおける事態によるとし、フー

ヴァーのリーダーシップを称え、彼の対策を列挙して賞賛し、農産物に対する高率関税と連邦農務局の活動に農民の注意を促した後、「経済的に安全で且つ面倒な官僚制度をとまわずに管理運営できるなら」需要に対して生産を均衡させることを助けるいかなるプランをも支持することを約束し、「生産を均衡させようとする農民の努力を助けるものとして、耕作面積の抑制」の重要性を示唆した。このサジェッションは、後にローズヴェルト民主党政権下で農業調整法によって行なわれることになる政策を見れば特に重要な意義を持つものと言える。更に、その政綱は金本位制の護持に努めるとともに通貨インフレをもつてする救済に反対すると声明し、銀行業構造の健全化と「監督当局の権限の拡大による」預金者の保護のための銀行法の改正、通貨問題に関する諸問題を考究する国際会議への合衆国の参加、関税委員会の活用、移民の制限、雇主と彼等自身が選んだ被用者の責任ある代表者による団体交渉の保証その他労働者を援助し保護する諸法、州際公益事業の監督・規制・統制、政府の部局の改組等々を約束し、そして特に国家の信用を維持すること、健全な通貨と信頼し得るドルを擁護し維持すること、均衡財政の原則を堅持すること、租税負担を軽減するように濫費・悪弊を除去し政府の経費を徹底的に削減することに努めること、ビジネスを増進させ失業者を救済するために健全な財政・経済上の諸原則と矛盾しないあらゆる手段を講じることなどを強調した。同大会で大きな論争を呼んだ禁酒法の問題は合衆国憲法修正第一八条の廃止問題に就いては——その年の大統領選挙に少なからぬ影響を及ぼすことになったのであるが——条件付きで州の問題とするようその規定を修正するとしたにとどまった。

それに対し、民主党全国大会で採択された政綱は、「未曾有の経済的および社会的困窮」の主な原因は世界大戦以後の共和党政権によって行なわれた政策にあるとした後、先ず（笑ってはいけない！）連邦政府の経費を

少なくとも二五%節減することと支払い能力に応じた課税によって予算を均衡させ国家の信用を維持することを提唱し、健全な通貨、「歳入のための〔外国品が国産品と〕競争できるような関税」、互恵関税協定と国際貿易を回復するための国際経済会議の開催、失業救済を行なうための州に対する連邦政府の信用供与、公共土木事業の拡張、労働時間の大巾短縮とそれによる雇用の促進、州法の下での失業および老齢保険制度、農場と住宅の抵当流弊を防止するための融資の改善、農業協同組合運動の発展、農産物の過剰作付けの抑制、農民の主要農産物の受取り価格を経費以上にするための合憲的なあらゆる措置、独占禁止法の強化、他州にも有価証券を売っている持株会社・州境を越えて事業を行なっている公益事業会社の料金・証券および商品取引所の規制や取締り、商業銀行(普通銀行)が証券会社を子会社として持つことの厳禁・商業銀行業務(普通銀行業務)と投資銀行業務の徹底的な分離・投機目的のために連邦準備銀行から貸出しを受けることをより、厳しく制限することなどを含む銀行制度の改革、フィリピンの独立とプエルトリコの究極における州への昇格、国際的な銀行家による外国の有価証券の販売の抑制、禁酒に関する憲法修正第一八条の撤廃とそれまでの措置として憲法が認めている範囲内のアルコール含有量が少ないビールその他の飲料の製造と販売を合法化し〔それに対する課税によって〕適当にして必要な〔国庫の〕収入が得られるようにするためウォルステッド〔禁酒〕法を即刻改正することなどを主張した。<sup>(2)</sup>

民主党の大統領候補に指名されたローズヴェルトは飛行機でシカゴに向かい七月二日に民主党全国大会で大統領候補指名受諾演説を行なったが、その演説は、初めの部分(彼の古くからの親友ルイス・M・ハウがそのために作成した原稿の第一ページが採用された)を除き、彼が初め冗談めいて「枢密院」(Privy council)と呼んだ後にブレイン・トラストとして広く知られることになる顧問団の中心的人物コロムビア大学の行政学の教授レイモンド・モウ

リが作成した草稿に彼と彼のためそのような顧問団を編成した彼の友人（ニューヨーク州知事としての彼の顧問を務めていたが、希望通り彼によってニューヨーク州最高裁判所判事に任命された）サミュエル・I・ローゼンマンが手を加え（長過ぎたので短くすることに努めた）特にローゼンマンが結びの言葉を付け加えた原稿に従って行なわれたのである。<sup>(3)</sup> 彼は、その演説の中で、恵まれた少数者に援助を与え繁栄させれば繁栄は労働者、農民、小実業家に及ぶという考えが共和党の伝統になっていると非難し、連邦政府の経費の節約、憲法修正第一八条の撤廃、外国およびアメリカの有価証券の発行・販売の取締り、悪徳金融業者からの預金者の保護、失業救済のための始業後は政府の援助なしに続けて行けるような公共土木事業の拡張、労働時間の短縮、広大な面積の耕作限界地と遊休地の林野への転換（＝再植林による失業救済）、人口の半分を占める農業に生計を依存する人たちの救済——農産物の余剰の減少のための農業生産の自由意志による抑制計画と農地・小住宅抵当金融の改善、世界貿易を回復するために互恵通商協定の締結などを提唱し、最後に「諸君に対して、また私自身に対して、私はアメリカ国民のためにニュー・デールを誓約します……」と述べた。<sup>(4)</sup> この演説の中で述べられたことは、前記のように初めの部分を除き、彼が同年四月七日にオールバニ（ニューヨーク州の州都）で全国ネットワークのラジオを通じて行なった「忘れられた人」という題で知られることになった十分間の演説（モウリがその原稿を作成した）<sup>(5)</sup> の中で述べたことに民主党の政綱の中の重要な項目の多く（すべてではない）に彼とモウリら流の解釈を加えて付けたものになった。したがって、銀行制度の改革や独占禁止法の強化などのような一般の預金者、中小企業家、一般消費者にアピールし大銀行・大会社に嫌われるようなことに就いては言及しなかった。

その結びの言葉の中の「ニュー・デール」という語は、ローゼンマンが『ニュー・リパブリック』誌の最新

フーヴァー大統領の不況対策(二十五)

号に掲載されたスチュアート・チェイスの論文の標題「アメリカのためのニュー・ディール(新政策)」を思い浮かべ特別な意味に就いては考えず、それからとったのだらうとも彼がモウリの覚え書からピックアップしたとも言われているが、ローゼンマン自身はそのことを書いていないし、しばしば言われているようにウッドロウ・ウィルソン(ローズヴェルトは彼の下で海軍次官を務めた)の「ニュー・フリーダム」とシーオドア・ローズヴェルトの「スクウェア・ Deal」を結び付けたものということに就いてもローゼンマンは「それが書かれ或いは述べられた時には」そのような意図はなかったと述べており、彼(ローゼンマン)は「ローズヴェルトが選挙されたら過去十二年間ワシントンに存続した古い種類の政治上・経済上の考えが終わることになるだらうということ、政府の主な関心事はもはや経済的ピラミッドの頂点にある金融(機関)や株式会社の方ではないだらうということ、政府の第一関心事はこれからは山の底部の大衆のことであるということ、国民の中の『忘れられた人々』(婦人も小児も含む)に対して彼等に経済上の競争と幸福の追求においてより良い機会を与えるようカード(トランプの札)が配り直されるべきであるということを示そうとしたのである」と書いている。<sup>(6)</sup>「ニュー・ディール」という言葉はアメリカで古くから用いられており、特に南北戦争後の「再建」(合衆国から分離した南部諸州の合衆国への完全復帰)の時期にしばしば述べられ一九二四年にはロバート・M・ラーフォレット(ウィスコンシン州選出上院議員、一九二四年に共和党を脱党して進歩党を組織し同党の大統領候補に指名された)が自伝の中で「われわれはニュー・ディールの時が到来したと信じる」と書いており、<sup>(7)</sup>モウリはローズヴェルトのその演説が行なわれる六週間前にニュー・ディールという言葉でローズヴェルトに渡した覚え書の中で書いてその覚え書の写しを著書の中で示している——<sup>(8)</sup>それを見れば、モウリが書いた覚え書の中からローゼンマンがその言葉をピックアップしたと考えられ

る。そして、おもしろいことに、ローズヴェルトが大統領候補指名受諾演説を行なった同じ日、数時間前に、同じ議場で、アラバマ州の代議員ジョン・マクダファイがジョン・N・ガーナー（下院議長）を副大統領候補に指名する演説の中で「アメリカ人の諸問題の処理にはニュー・デールが必要である」と述べていたのである。<sup>10</sup> その時「ニュー・デール」という言葉にだれも注意を払わなかったほどその言葉は広く用いられていたと言ふことができるだろう。ともかく、ローズヴェルトの大統領候補指名受諾演説の中で述べられた「ニュー・デール」がその時どんなことを示そうとした言葉であったかということはローゼンマンが書いているところから良く知ることができ、それが具体的には、どのような政策を意味するものであったかということはその演説の概要を示したところで挙げた事項がそれだと言えるだろうが、それらのうち、「勝利を祝ってビールで乾杯しよう」ということと再植林による失業救済、農業生産の自由意志による抑制計画、互恵通商協定の締結など以外はフーヴァーが既に提唱していたことに殆ど含まれていたし——農業生産の自由意志による抑制計画にしてもそれをいかにして実施するかということを示していない——、フーヴァーの提案の方が広汎で具体的であり、且つ提案項目の間で矛盾がない。ローズヴェルトの「……私はアメリカ国民のためにニュー・デールを誓約します……」という言葉は、彼が五月二十二日にオウグルソープ大学（ジョージア州アトランタ）で行なった演説（ブレイン・トラストのメモバーによってでなく、彼と親しい新聞記者グループの中のニューヨーク『ヘラルド・トゥリビューン』の記者アーネスト・K・リンドリによって起草された<sup>11</sup>）の中で「この国は絶え間ない実験を必要とし、……要求し」ており、「一つの方法を選びそれを試み……それがうまく行かなかつたら、率直にそれを認め、他の方法を試み」と言ったように、ともかく何か、何んでもやってみるということであつただろう。

フーヴァー大統領の不況対策（二十五）

ローズヴェルトは七月三十日にオールバニでラジオを通じて民主党の政綱を論じる演説を行ない、項目別に簡潔に意見を述べながら、それを殆ど全面的に支持する意思を表明したが、銀行制度の改革や独占禁止法の強化には触れなかった。<sup>43</sup> 彼が証券取引所や持株会社に対する連邦の規制とともに銀行制度の改革、国法銀行に対する連邦の規制の強化や商業銀行業務と投資銀行業務の分離を提唱するにいたるのは八月二十日にコラムバス（オーハイオ州）で行なった演説の中である。<sup>44</sup> それらのことのためにフーヴァーが努力してきたことは既に述べた通りである。

この間、フーヴァーは大統領候補の再指名の獲得や大統領に再選されることよりも、第七十二議会第一会期中はもろろん、議会休会（七月十八日）後も大統領としての本来の仕事と特に景気回復のための処置を第一と考え、<sup>45</sup> 大統領候補の指名を受諾する演説を行なったのは八月十一日である。「繁栄はもう間近に來ている」という彼の予言は寄席芸人のジョーク的<sup>46</sup> になり、侮辱さえ受けていたフーヴァーは誰が民主党の候補であろうと敗北することは確実であったと考えられがちであるが、決してそう言いされるものではなかった。相手が一九二八年におけると同様アルフレッド・スミスであったら、或いは副大統領候補に指名されたジョン・N・ガーナーであったら（民主党の大統領候補指名投票の第三回目の投票まで両者の得票を合計してもローズヴェルトのそれに遙かに及ばなかったにしてもローズヴェルトは指名されるに必要な三分の二の票を獲得できなかった<sup>48</sup>）フーヴァーは再選されたかも知れない。彼は相手がローズヴェルトと判明すると、ローズヴェルトは西部と南部の急進派の支持を受けるだろうが、四カ月の選挙運動で東部の実業界の信用を失うだろうから勝利は確実と考えていたようである<sup>49</sup>とも考えられる。本題（二十四）（本誌第六十九号所収）で見たように議会在休会する七月中旬ごろから緩やかではあったが景気は上

昇に向かっていたことが、彼の自信を強めたようにも思われる。彼は回顧録の中で「一九三二年の大統領選挙」(第三巻の第十九章(第三十一章)を書いた時、初めに「一九三二年に再選される見込みは殆どなかったが……」と述べ、選挙戦の最終段階を取り上げたところ(同上第三十章)の最後に「われわれが予想していたように、われわれは選挙に敗れた」と述べているが、彼が不吉な予感に襲われることになったのは他州でよりも早く九月に行なわれたメイン州——共和党の地盤と考えられていた——での選挙に共和党が敗れたのを知ってからであり、それが彼を遊説旅行に駆り立てることになったのであり、彼が敗北を予想しなければならなかったのは十月になって彼が先ず彼が生まれたアイオワ州に遊説旅行を行なおうとした頃からであろう。それまでに悪い情報ニュースは日毎に多く入って来ていたが、彼がアイオワ州の州都ディモインに出発する日が近づくにつれ、その都市でストライキを行なっている農民のデモが起こっており、そのデモ隊が彼をやじり倒し、卵を投げる恐れがある、暗殺計画の恐れさえあると言われるようになり、同州の共和党の指導者のうち二人が彼に遊説旅行をやめさせるようワシントンに來たほどであったし、ディモインで支持者を集めて無事に演説を行なうことができても、帰りの汽車がとまるたびに集まっていた民衆の態度も好意的ではなかったのである。それでもなお、その遊説旅行にも同行した彼の秘書シーオドア・G・ジョスリンによれば、「彼は国民を信じていた。彼は勝利が保証されているかのよう」に戦い続けたのである。<sup>23</sup>

(3) Kirk H. Porter and Donald Bruce Johnson (compiled), *National Party Platforms, 1840—1960* (Urbana, Ill.: The University of Illinois, 1961), pp. 339—51.

(2) *Ibid.*, pp. 331—333. ショーン・ガンサーは、この民主党の政綱プラットフォームを示した時、「政府支出額の二五%削減と均衡予算

フーヴァー大統領の不況対策(二十五)

フーヴァー大統領の不況対策 (二十五)

算」を最後に挙げ、その前に「さへも笑つて過ぎる」とはならず」<sup>14</sup>と書いている。John Gunther, *Roosevelt In Retrospect: A Profile in History* (New York: Harper & Brothers, 1950), p. 273. 丈田の削減と予算の均衡が當時いかに重要視されていたかという点とローズヴェルト民主党政権が最初の四年間の間だけでケネディー・ディールのためにいかにその公約を踏みにじったかという点とは忘れてはならぬ。

- ③ Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Age of Roosevelt*, Vol. I: *Crisis of the Old Order*, p. 403; Frank Freidel, *Franklin D. Roosevelt*, Vol. III: *The Triumph* (Boston: Little, Brown and Company, 1956), pp. 261—64, 312—14. なお、ブレイン・トラスターのメンバーとして、レクスマン、G・タグウェル、ナイキンド、モウリト、ブルフ・A・バーリー二世<sup>15</sup> (コロンビア大学の法学の教授、株式会社法をおよび株式会社問題の専門家)と彼自身 (コロンビア大学の経済学の教授、農業問題の専門家)の名をあげ、創設者としてサミュエル・I・ローゼンマンとD・M・シル・オウコナ (ローズヴェルトの弁護士仲間)の名を示し、フソウシエイツ (華メムナー)としてロム、K・スタウラウス (ニューヨーク州臨時救済局長)、ヒュー・シヨンスン (元軍人で財界人)、チャールズ・ウィリヤム・タウシグ (アメリカ糖蜜会社の社長)の名を示している。Rexford G. Tugwell, *The Brain Trust* (New York: The Viking Press, 1968), xi—xiii.

- ④ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, compiled and collated by Samuel I. Rosenman, Vol. I: *The Genesis of the New Deal, 1928—1933* (New York: Random House, 1938), pp. 647—59.

- ⑤ Raymond Moley, *After Seven Years* (New York: Harper & Row, 1939), pp. 5, 10. Frank Freidel, *op. cit.*, p. 267. 「忘れられた人」という言葉は、一八八三年にウィリヤム・グランム・サムナーによって物静かな謙虚で社会に有益な市民の意味に用いられたが、その演説の中ではもっと広く中層階級のみならず下層階級を含めた寧ろ経済社会のピラミッドの底辺とそれに近い部分にある人の意味に用いられ、ナポレオンがウォータールー (ワテロー)で敗れ

たのは価値の少ない騎兵を重視し歩兵のことを忘れたためであり、現下の不況に就いて考える場合、経済的ピラミッドの底辺にある経済的歩兵のことを忘れてはならないと言おうとしたのである。この演説は、フーヴァーの政策は政府が経済的ピラミッドの頂上のものたちに援助を与え、それによる恩恵が下にしたたり落ちて全体に及び繁栄がもたらされるとしているが、最もそれを必要としている底辺の人たちに届くまでに恵みの水は乾いてしまうという見地に立ち、繁栄は上からではなく下から生じさせなければならぬとし、(1)農業によって生活しているか或いは農場にその存立が直接依存している小さな町で生活しているアメリカの人口の半分を占める人たちの購買力を増加させること―「都市の労働者の雇用」と「農民のかね<sup>ド</sup>」との相互依存はこのことを緊急なことにしている―、(2)住宅および農場の抵当流れを防止すること、(3)大きな銀行や株式会社と同様、地方の小さな銀行や会社に援助を与えること、(4)ホーリースムート関税「法による関税」を世界の貿易を殆ど消滅させるほど高い関税障壁を多くの国に設けさせることになつたものと非難し、余剰工業生産物を外国に売ることができるようになせ、「物資の相互交換」を行わせるようにするため関税を引下げること主張した。なお(1)～(4)の番号は演説の中では付けられておらず、便宜上付けたのである。The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt, Vol. I, pp. 624—27.

- ⑨ Arthur M. Schlesinger, Jr., *op. cit.*, Vol. I, p. 403. Frank Freidel, *op. cit.*, Vol. III, p. 313.
  - ⑩ Samuel I. Rosenman, *Working with Roosevelt* (New York: Harper & Brothers, 1952), p. 71.
  - ⑪ Hans Sperber and Travis Tritschuh (eds.), *American Political Terms: A Historical Dictionary* (Detroit, Wayne State University Press, 1962), *op. cit.*, pp. 284—85.
  - ⑫ Raymond Moley, *op. cit.*, pp. 23, 147.
  - ⑬ Frank Friedel, Vol. III, *op. cit.*, p. 315.
  - ⑭ *Ibid.*, p. 315.
- フーヴァー大統領の不況対策(二十五)

フーヴェー大統領の不況対策(二十五)

㉟ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, pp. 639—47; Raymond Moley, *op. cit.*, p. 24; Samuel I. Rosenman, *op. cit.*, p. 65. ㊱「オマグルンブ演説」として知られることとなる演説の中で、彼は、アメリカ経済が産出することができる巨大な量の財貨の生産と配給を適当な計画を通じて統制することが必要だと主張しながら、購買力の不足と生産に対する過度の投機的な投資とが一緒になって不況を起こしたと説き、不況からの出口は生産者のことを考えるより消費者のことを考えることによつて見いださなければならぬと述べた。しかし、彼がそれらのための具体的な方法で就つては述べず、*「この国は起つてきた絶え間なる実験を必要とし……」*と本文で示したからと推してゐる。

㊲ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, pp. 659—69.

㊳ *Ibid.*, pp. 682—83.

㊴ William Starr Myers and Walter H. Newton, *The Hoover Administration: A Documented Narrative*, p. 238.

㊵ *The State Papers and Other Public Writings of Herbert Hoover*, Vol. II, p. 247.

㊶ Eugene H. Roseboom, *A History of Presidential Elections* (New York: The Macmillan Company, 1957), p. 433.

㊷ *Ibid.*, p. 438.

㊸ Arthur M. Schlesinger, Jr., *op. cit.*, Vol. I, p. 431.

㊹ *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 218, 343.

㊺ George H. Mayer, *The Republican Party, 1854—1966*, Second Edition (New York: Oxford University Press, 1967), p. 424.

③ Theodore G. Joslin, *Hoover off the Record*, pp. 302—312.

④ *Ibid.*, p. 313.

二

先に述べたように、フーヴァーは八月十一日になって大統領候補の指名を受諾する演説を行なったが、彼はその演説を政務を怠らないですむワシントンのコンステイテーション・ホールで行ない、その中で過去三年間の経済の動向を概観した後、彼のそれまでの不況対策のうちのいくつかと政府の役割に就いて説明するとともに、今後とられるべき政策は共和党の政綱の中に示されていると述べ、特に保護関税を擁護し、民主党が主張している「歳入のための「外国品が国産品と」競争できるような関税」に反対し、超党派的な関税委員会の有用性と現行の関税の柔軟性を強調し、予算の均衡、移民の厳重な制限、州際電力事業の規制、閉鎖された銀行の預金者に対する速やかな救済、農民の租税負担の軽減等を取り上げて彼の党の政綱を支持することを表明した<sup>①</sup>。その演説はかなり長いものであったが、彼の崇拜者が熟知していることが述べられたに過ぎない<sup>②</sup>。

ローズヴェルトが、先に述べたように八月二十日にコラムバス(オーハイオ州)で演説し、八月二十七日にシークート(ニュー・ジャージー州)で演説した後、九月十二日から十月三日まで太平洋岸にいたる西部に、十月十八日から十月二十五日まで中西部と南部に、十月二十九日から十月三十一日までニュー・イングランドに遊説旅行に行き、その間に八十以上の都市で選挙演説をし、十月中にオールバニからラジオを通じて二回演説し(彼は選挙戦にも施政にもラジオを利用して最初の大統領と言われている)、十一月になってから四回ニューヨーク市で演説した<sup>③</sup>。

フーヴァー大統領の不況対策(二十五)

フーヴァー大統領の不況対策（二十五）

に対し、フーヴァーは、先に述べたように十月になってアイオワ州に行き十月四日にディモインで演説した——その場所がら当然なこととして農業問題が中心に取り上げられた——後、十月中旬から下旬にかけてクリーヴランド（オーハイオ州）とチャールストン（ウェスト・ヴァージニア州）とデトロイト（ミシガン州）とインディアナポリス（インディアナ州）とニューヨークで、十一月になってセントルイス（ミズーリ州）とセントポール（ミネソタ州）とソールトレイク・シティ（ユタ州）で、更にラジオを通してエルコウ（ネヴァダ州）から演説した以外は、汽車で遊説旅行に出かけた際に給水駅で行なったなん回かの即席演説を除けば、選挙演説を行なわなかった。<sup>(4)</sup> フーヴァーは、演説の数が少なかった理由に就いて、通常の行政上の仕事のみならず不況に対処する責任が大きな負担になっていたことに加え、ローズヴェルトのように演説を他のものに代作させず、自分の演説は自分で書き——保存されている証拠が示しているように殆どすべての演説の草稿は自分の手で書いたものであり、それらを「僚友」に見せてサジェッションを受けたにしても、それも自分自身の手で書き入れた——、一つの演説を行なうにも準備に多くの日数がかかったためと述べている。<sup>(5)</sup> 彼は独りで仕事をするのを常としたと言われているが、彼の選挙演説の草稿がすべて彼自身によってつくられたというのではないだろうが、<sup>(6)</sup> 彼は熱心に再選されることを望みながら、演説の代作者を求めず、その代わりに閣僚（ミルズ財務、ハイド農務、ドーク労務、ウィルバー内務、ハリ陸軍、ブラウン郵政各長官）やクルリッジ前大統領のほか彼を支持した多くの上院議員、下院議員その他のものの応援演説に期待をかけていた。<sup>(7)</sup>

フーヴァーは一九三二年の選挙戦を回顧して、その論争点は、不況に対するフーヴァーの責任、フーヴァーはそれに関して何もしなかったということ、連邦政府の無茶な出費と租税の問題、金本位制と管理通貨の問題、関

税問題、農業政策に関する問題、集産主義的計画経済の問題、最高裁判所に関する問題、ビジネス規制の問題、民間事業と政府の競争の問題、禁酒問題、「失業」労働者と公共土木事業に関する問題、対外政策、困窮者の救済とその他の人道的な奉仕事業に関する問題に要約されると述べているが、ロイ・V・ピールとトマス・C・ドネリは「最も注目を受けた問題は、(1)不況とそれからの脱出策、(2)農業の救済、(3)失業救済、(4)関税、(5)行政改革と政府経費の削減、(6)公益事業と水力〔発電事業〕、(7)禁酒〔解禁〕、(8)対外関係および(9)租税と通貨であった」と述べている。<sup>⑧</sup>

ともかく両者の間の論戦は当然のことながら不況の原因とそれに対する共和党とくにフーヴァーの責任と、不況に関連ある高率保護関税、不況の被害者の救済、不況の進展を阻止するための生産過剰に対する政策が中心になった。政府経費の節約と予算の均衡、連邦と州の雇用促進機関の協調、長期間の公共土木事業計画、欠くことのできない公共福祉サービスの継続のほか、銀行倒産の防止と預金者の保護、詐欺的な証券売買をやめさせるための取引所の規制に就いては両者の意見は一致あるいは殆ど一致していた——両者とも特に均衡予算という経済上神聖なものと認められていたことを守ろうとしていたことに特に注目すべきである——が、それらのための具体的な処置あるいは程度に相違があり、特に不況による歳入の減少を補う方法、失業者に職を与える新しい方法、産業に刺激を与える方法に就いては意見は異なっていた。フーヴァーは民主党内で高まって来ていた不換紙幣の発行の要求に神経をとがらせドルの価値の維持・金本位制の維持を強く主張していた。

ローズヴェルトは、フーヴァー政権は誤った経済政策によって投機と生産過剰を促進して経済的崩壊を起こしたうえ、それを軽視し、その重大さに就いて国民に誤った判断をさせ、更にその原因を外国のせいにする誤りを

犯し、それを生ぜしめた国内の悪弊を認めて是正することを拒否し、速やかに救済を行わず、改革を怠ったと述べ（彼はその主張は繰り返して述べた）、不況は主として外国に起因するものであるというフーヴァーの前からの主張に反対する——ブレイン・トラストのメンバーは不況の原因は国際的なものだというフーヴァーの主張に早くから反対しており、特にレクスフォード・G・タグウェル（コロンビア大学の経済学の教授）は生産性の向上による利益を賃金引上げ或いは物価引下げに回さなかったことから生じた国民の購買力の低下による過少消費にあったと主張していた——とともに、彼は不況の進展をくい止めるために何もなかっただけでなく、「グランディ関税法」（ホーリッスムート関税法）によってアメリカに売ることによってアメリカから買うことができていた外国人の購買力を失わせた一方で世界の四十カ国に報復的な関税障壁を設けさせてアメリカの産業に打撃を与えたと非難し、更にフーヴァー政権はアメリカ人のかねを後進国や不具になった諸国に貸すことによって外国に市場を開こうと努める政策を促進したが、「それは全くそして完全に不健全なものである」と非難し、連邦農務局は巨額の出費を生ぜしめただけで農産物の価格を安定させることに失敗したし、政府の経常費が一九二七年から三一年までに約十億ドル増加していることを指摘して共和党政権の無駄使いが大きな赤字を生ぜしめていると説き、租税収入を増加させる方法として支払い能力に応じた課税を行なうこととウォルステッド法を修正してビールの製造・販売を合法化しビール税を課するとともに、政府の機関を適当に統合し、無益な委員会や部局を廃止し、政府の経費を二五％節減するという民主党の政綱の中に掲げられたことを即実行すると約束した一方で、失業救済のための公共土木事業の拡張を約束し——そのために公債の発行を提唱し、それをフーヴァーのように政府の支出をそれからの収益で回収できるものでなければならぬというような条件を付けなかった——、主要農産物の減産

と価格の決定を意味することを主張し農産物の生産割当て計画と呼ばれるようなことと富と生産の分配の均等化・〔工業における過剰生産を抑制するための〕工業生産の統制ないしは調整（生産と消費との調整）を示唆し、失業者の雇用と農産物価格の上昇と工業生産物価格の上昇によって国民の多数の購買力を増加させ、購買力の増加によって産業の振興を促そうとしたのである。フーヴァーは、そのような農業生産の計画化、工業生産の統制ないしは調整、更に政府による電力事業（州有の或いは連邦所有の発電用水力の所在地の政府自身による開発のみならず州政府或いは連邦政府によるその電力の送電・販売）、政府（行政部）による最高裁判所の支配などに関するローズヴェルトの提案や主張の中に、ファシズムと共産主義をあわせたような集産主義（collectivism）のにおいをかぎつけた。ローズヴェルトは、共和党を攻撃するよりフーヴァー個人と彼の政府を攻撃し、いわゆる進歩的な態度を示してフーヴァーに不満を持っていた共和党内の特に革新主義的・進歩主義的な人々とその支持者たちを味方に引き入れた。彼は、農民や小企業家や失業者その他の困窮者に不況と彼等の困窮の原因はフーヴァーの無為あるいは失政にあり、彼による連邦政府の積極的な措置が彼等を救済すると説けば喝采を受けることができた。

フーヴァーはローズヴェルトの攻撃に対していかに反論したかということは、ローズヴェルトの重要な演説の内容とともに、本誌第五五・五十六合併号（昭和五十一年十二月発行）所収の「一九三二年のアメリカ大統領選挙戦における不況対策論争」の中で示しておいたので見ていただきたいが、彼はただ弁護に努めたのではなく逆襲していることに注意を促したい。不況の原因やグラウンディ関税法（ホーリスムート関税法）に就いての彼の反論は前に早く述べたところから知っていただけだろう。特に後者に就いて、彼は状況に就いて税率を変えることができる超党派的な関税委員会の機能に就いて説明し、アメリカの輸入の六六％が無税であり、現行の関税は

なにより農業・牧畜業・酪農業を保護していると主張し、民主党とローズヴェルトが提唱している互恵通商協定はいかなる国にも特惠、讓歩、差別を認めず、どの国も平等に待遇するというアメリカの主義を破るものであるばかりでなく、農民を犠牲にして初めて外国から讓歩を受けられると逆襲し、ローズヴェルトに「道理に適った〔限界〕点、常識と事実によって望ましいとされる点を越えてそれら（関税）を引き下げるべきではない。……労働者は……不安に思う必要はない」と述べて工業に対する保護関税を大して引き下げる意図はないことを示させ、更に農産物に対する関税が「引き下げられるように言っているのではない」と言わせ、選挙戦が最終段階に入った頃（十月三十一日にボストンで）遂に「私は……アメリカの工業に対してだけでなく農業に対しても継続した保護〔を与えること〕に賛成している」と言わせるに至った。また、後進国や不具になった国に対して行なわれた貸付けに対するローズヴェルトの非難に対して、フーヴァーは、そのような外国の債券の大部分はニューヨークで売り出されたものではなかったか、それを規制する連邦法はなく、取締りの責任はニューヨーク州知事（フランクリン・D・ローズヴェルト）にあったのではないか、彼はニューヨーク州知事就任前に外国の有価証券を売る会社をつくっていたのではないかと逆襲した。大不況の発生を引き金になったニューヨーク株式取引所での株価の大暴落を生ぜしめた根本的な原因は特にニューヨークで行なわれていた株式投機熱をおおる行為、詐欺的な宣伝による株式の発行・販売慣行、人為的な株価のつり上げ等によるものではなかったか、それらを取締るべきニューヨーク知事は何をしたかと彼は言いたかっただろう。ローズヴェルトのフーヴァーは救済のために「何もしなかった」或いは「充分なことではしなかった」という非難に対し、彼が公共土木事業のために共和党権は巨額な支出を行なった、そのための連邦政府支出金は一九二九会計年度における約三・五七億ドルから一九三二会計年

度には約六・五六億ドルに増加し、その過去四年間の合計額はパナマ運河の建設費を含む過去三〇年間のその合計額を超える約二〇億ドルになると反論し、現共和党政権は無駄使いし過ぎると非難し——「私は現政権がわれわれの歴史上平時に最も多くかねを使ったことを糾弾する」とも述べている——ブレイン・トラストの一員レクスフォード・G・タグヴェルその他のものから公共土木事業費として年間五億ドルの支出を主張するよう勧められた時に尻ごみしていたローズヴェルトに失業者の救済のため年間九億ドルの公共土木事業費の支出を約束させることになった。<sup>24</sup> 農業の救済のためにもフーヴァーが何をしたか、そして何をしようとしていたかということにはわれわれがこれまで見てきたところからわかるだろう。われわれは連邦農務局によって行なわれた農産物価格の安定策は大きな財政上の負担をとめないながら失敗したと認めなければならぬが、彼はほかに多くのことをしようとしていたということ忘れてはならない。彼は、そのうちでも特に、農民の金融上の負担を軽減する措置を講じようとしたのに民主党が支配した議会に邪魔されたため彼が提案したような措置が完全に且つ早く行なわれなかったことを残念がっていたが、ローズヴェルトに（九月二十九日にアイオワ州スピーチで）「きょう私は……私が知る限りでは初めてフーヴァー大統領政府が農場抵当権や住宅抵当権というような問題があるという事実を発見したのだということを読んだ」と言わせたのである。また、フーヴァーは民主党が「通貨をいじくりまわし」、銀問題を再燃させたり、法定不換紙幣の発行を支持したりして合衆国政府の信用を破壊しようとしていると見て苛立っており（彼が金本位制をいかに重要視していたかということは先に述べた通りである）、彼は選挙演説の中で金本位制の維持の必要を繰り返して説き、ローズヴェルトの主張をぐらつかせ、ローズヴェルトに、選挙の直前に、有価証券における金約款を「誓約」、神聖な破られてはならない堅い約束と言わせ、事実上金本位制を

フーヴァー大統領の不況対策 (二十五)

維持することを約束する大しほじりをせよしたのいあむ。<sup>83</sup>

- ① *The State Papers and Other Public Writings of Herbert Hoover*, Vol. II, pp. 247—65.
- ② Roy V. Peel and Thomas C. Donnelly, *The 1932 Campaign: An Analysis* (New York: Farrar & Rinehart, Inc., 1935), p. 127.
- ③ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, pp. 621—22. ねんどの演説のふかいたの演説の回書 (pp. 647—865) に収録なす。<sup>84</sup>
- ④ フーヴァーは回顧録の中で「一九三三年の選挙戦の間」八月十一日に行なった大統領候補指名受諾演説を加えて「私は僅か九日の大なる選挙演説を行なわなかつた」と告白す。<sup>85</sup> (*The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, p. 233) ねん *The State Papers and Other Public Writings of Herbert Hoover* なる本の私の彼がチャールズ・N (チャールズ・カトリック) とウィリアム・M (ウィリアム・M) (ネブラスカ州) に行なつた演説の汽車の給水駅を行なつた頃の演説を収録す。<sup>86</sup> *Ibid.*, Vol. II, pp. 247—65, 293—319, 359—84, 389—428, 431—79.
- ⑤ *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, p. 233.
- ⑥ Gene Smith, *The Shattered Dream* (New York: William Morrow & Company, 1970), pp. 189—90.
- ⑦ *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, p. 233. ターナミンの演説は President Hoover and Ex-President Coolidge, *Campaign Speeches of 1932* (Garden City, N. Y.: Doubleday, Doran & Company, 1933), pp. 66—79, 262—68 に収録なす。<sup>87</sup>
- ⑧ *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, p. 235.
- ⑨ Roy V. Peel and Thomas C. Donnelly, *op. cit.*, p. 124.
- ⑩ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, pp. 669 ff, 677, 835—36, etc.

- ③ Arthur M. Schlesinger, Jr., *op. cit.*, Vol. I, p. 402.
- ④ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, pp. 636—38, 834—35. ローズヴェルトは「その時々の大連の事態を察し畏れた」。
- ⑤ *Ibid.*, Vol. I, pp. 672—74.
- ⑥ *Ibid.*, Vol. I, pp. 795—812.
- ⑦ *Ibid.*, Vol. I, pp. 409, 414—15, 447, 466, 653—54, 790—91.
- ⑧ *Ibid.*, Vol. I, pp. 704—09. ノンケンピ・キマリヤ、そのようなサシマシモンを含むトウバロカ（キャンザス州）での演説は、共和党の地盤と考えられていた中西部の農民の票をローズヴェルトが獲得することに非常に役立ったと述べている。Raymond Moley, *op. cit.*, pp. 44—45.
- ⑨ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, pp. 751—53, 784.
- ⑩ *Ibid.*, Vol. I, pp. 739—41, 837.
- ⑪ *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 324—26.
- ⑫ *The State Papers and Other Public Writings of Herbert Hoover*, Vol. II, pp. 256, 309—11, 342—43, 397—98; *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 288—97.
- ⑬ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, pp. 767, 885—36, 853; *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 297—99.
- ⑭ *The State Papers and Other Public Writings of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 400, 403—04; *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 252—54. クリス・G・ウォーレンは「このローズヴェルトの非難を後の彼の輸出入銀行、彼の軍需品農産物等を連合国に貸与する Lend-Lease 計画および第二次世界大戦後の民主・共和両党の後進国援助フーヴァー大統領の不況対策（二十五）」

フーヴァー大統領の不況対策 (二十五)

計画と比較せしむる書に在る。Harris Gaylord Warren, *op. cit.*, p. 260. なお、フーヴァーはローズヴェルトが設立したその会社の各々 Federal International Banking Company 及び FIDELITY 及び Federal International Investment Trust の各々である。彼は一九一七年のその後の International Germanic Trust Company の設立者の一人になつて居るし、それ以前一九二二年に United European Investors, Ltd. (カナダで設立認可) の設立者の一人になり社長になつており、特に対独金融業に關係し、スタンフォード大学の戦争、革命および平和に關するフーヴァー研究所のフントニ・C・サットンに彼を國際的投資機師として取ら扱へしむる。Antony C. Sutton, *Wall Street and FDR* (New Rochelle, New York: Arlington House, 1975), pp. 18, 37ff.

⑧ *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, p. 761.

⑨ *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 311, 317; Raymond Moley, *op. cit.*, p. 173; *The Public Papers and Addresses of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, pp. 798, 852.

⑩ *The Public Papers and Address of Franklin D. Roosevelt*, Vol. I, p. 770.

⑪ *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 280—83; Harris Gaylord Warren, *op. cit.*, p. 262; Rixey Smith and Norman Beasley, *Carter Glass, A Biography* (New York: Longmans, Green, 1939), p. 485.

三

ローズヴェルトの主張や提唱したことの中に、金本位制の放棄、ニュー・デールの大規模な失業対策公共土木事業計画、農業調整法 (Agricultural Adjustment Act)、全国産業復興法 (National Industrial Recovery Act)、ネシー河流域開発管理局法 (Tennessee Valley Authority Act)、互恵通商協定法 (Reciprocal Trade Agreement Act) 等々、フーヴァー政権下では行なわれ或いは生まれ得なかつたものの胚種を見いだすことができるだろうが、そ

れらは、また、ローズヴェルトの公約の矛盾を示すものでもある。特に、ローズヴェルトも神聖視し公約した「均衡予算」はいかに崩されたか。ローズヴェルト自身の意見がはっきりしておらず、しかも彼の「ブレイン・トラスト」や他のアドヴァイザーたちの間で意見の対立があったこと、更に演説起草者が当該問題に就いて十分知識を持っていない場合がしばしばあったことなどのために——フーヴァーが言ったようにローズヴェルトの演説代作者の中に「無責任な或いは無知な人たち」や「選挙戦には知的誠実さは期待されていないという特殊な信念を持ったもの」がいたかどうかは別としても——、彼の演説の中にフーヴァーが述べているような「かなりの部分の計画の矛盾や事実の誤った説明や間違った説明」を見いだすことができるのである。<sup>(1)</sup>

フーヴァーは予算を均衡させ、民主党が要求していた不換紙幣の発行に反対し金本位制を護持して合衆国政府の信用とドルの価値を維持することと、合衆国憲法を忠実に守りローズヴェルトが主張したようなビジネスの規制・生産統制や政府による発電・配電事業に反対し企業の自由・人民の自由を擁護することが何より重要であると考えながら、彼と彼の政権に対する攻撃に反論し逆襲を行なった。彼はローズヴェルトよりも遙かに経済事情に通じていたし、合衆国憲法に忠実であろうとしたし、そして選挙戦における論争で繰り返し勝ち、全国新聞のうち六〇ないし六五％が彼を支持したが、民衆は選挙戦での論争の勝敗を判定して或いはローズヴェルトのニュー・ディールによる救済や改革は彼の他の重要な公約が破られて初めて実現され得るものと見抜いて投票するものではなかった。不況で苦しんでいた人々はローズヴェルトがなんとかしてくれようかと期待して投票したのである。民主党は、この年の選挙戦を有利に戦うために、われわれが見たように、第七十二議会第一会期中にフーヴァーが提案した不況との戦いに大きな効果があると思われるような方策は十分に且つ速やかに実施される

フーヴァー大統領の不況対策（二十五）

ことをあくまで阻止しなければならなかったのであり、ローズヴェルトは一九二四年頃から考えていたように不況を味方にして大統領選挙戦を戦うことができたのである。<sup>(4)</sup>フーヴァーは不況と戦い景気を回復させる健全な方針を提案しており、もし再選されたらローズヴェルトより早く且つもっと立派に成功しただろうが、不況は彼の敵であったし、それ以上に民主党とローズヴェルトの攻撃と、彼が生来持っていた人間味溢れる徳性と理解を悲惨な状態におかれていた民衆に伝えることができなかつたことが、彼の政治力と大統領としての威信を傷つけ、彼を絶望的な状態に追い込んだ<sup>(5)</sup>と言えるだろう。

一九三二年の選挙戦の資金として民主党は約二三七・九万ドル集め約二二四・六万ドル使ったのに対して、共和党は約二六五万ドル集めたが約二九五・二万ドル使った。<sup>(6)</sup>そして、一九三二年十一月八日にローズヴェルトが一般投票で二二八〇万九六三八票を得て四七二名の大統領選挙人を獲得したのに対し、フーヴァーは一般投票でローズヴェルトより約七〇〇万票少ない一五七五万八九〇一票しか得られず、ペンシルヴェイニア、コネティカット、デラウェア、メイン、ニュー・ハンプシャー、ヴァーモントの諸州で勝っただけで、五九名の大統領選挙人を獲得したにとどまり、民主党は下院では約七一・八％、上院では六二・五％を制することができることに<sup>(7)</sup>なつた。それにしても、フーヴァーと選挙に敗れた議員たちの任期はローズヴェルトと新しい議員の任期が始まる翌年三月四日まで残っていた。

本号では選挙戦中にも行なわれたフーヴァーの不況との戦い——選挙戦も不況との戦いであつたが、不況との直接の戦い——に就いても述べる予定であつたが、与えられた紙数が超過したため次号に譲り、次号ではそれと、選挙に敗れた後、特に十二月に開かれた第七十二議会第二会期中の彼の最後の努力に就いて述べたい。

- ① Raymone Moley, *op. cit.*, p. 59; *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III, pp. 234, 235.
- ② George H. Mayer, *op. cit.*, p. 424.
- ③ Edgar Eugene Robinson and Vaughn Davis Bornet, *Herbert Hoover: President of the United States* (Stanford, Calif.: Hoover Institution Press, Stanford University, 1975), p. 272; H. C. Byle, "The Editor Votes," *American Political Science Review*, August, 1938, pp. 597-611.
- ④ 拙稿「F・D・ローズヴエルト<sup>フーバー</sup>紐育州知事の不況対策」(成城大学大学院経済学研究所創設五周年記念論文集「昭和四十七年三月発行」所収)一八一—一八三ページを御覧いただきたく。
- ⑤ Arthur Krook, *Memoirs: Sixty Years on the Firing Line* (New York: Funk & Wagnalls, 1968), p. 143.
- ⑥ Eugene H. Roseboom, *op. cit.*, pp. 440—41. Edgar Eugene Robinson and Vaughn Davis Bornet, *op. cit.*, p. 272.
- ⑦ Eugene H. Roseboom, *op. cit.*, p. 441; U. S. Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1970*, Bicentennial Edition, Part II, p. 1083.

[以下次号]